

ぐんま教育フェスタで研究発表を行いました

専門職学位課程長 音山 若穂

2月7日、群馬県総合教育センターにおいて「ぐんま教育フェスタ」が開催されました。本年度はセンターによる研究発表に加え、教職大学院の研究発表も行われました。発表はいずれも在学中の課題研究の成果を基にしたもので、渋川市立橋小学校の栗田裕康さん（授業実践開発コース）による『小学校社会科における問題解決的な学習の単元指導モデルの開発～単元構想図と学習方略「社会科ナビゲーター」を活用して～』、高崎市立八幡小学校の福富明子さん（教職リーダーコース）による「学習に困難を示す児童の理解と支援―学校内外の多様な場や人をつなぐ協力的な取組を通して―」、そして群馬県立沼田特別支援学校の前島俊貴さん（特別支援教育実践開発コース）による「外国人児童に対する個別の指導計画に基づく学習・行動支援の検討」の3題でした。

いずれの発表も、一人一人の子どもに着目し、主体的な学びをどのように支援するかという視点に立った実践研究であった点が印象的であり、フェスタのテーマである「一歩先の学びのカたち」にもつながる内容でした。授業づくりや支援の在り方を具体的な実践を通して示すことで、参加者が自らの教育実践を振り返り、今後の改善を考える契

機となりました。

今回の発表は、大学院での課題研究の成果を一人でも多くの先生方に知ってもらい、授業づくりや学級経営、学校運営に活かしてもらいたいという願いを込めて行われたものです。当日は現職教員に加え、教職を志望する大学生や高校生も参加し、特に高校生からは積極的な質問が寄せられるなど、全体討論の時間が足りなくなるほど活発な意見交流が行われました。教職大学院での学びと研究成果が立場を越えて共有されることで、ぐんまの教育を担う人材の育成と教師力向上につながる貴重な機会となりました。



令和7年度 大学院教育学研究科(専門職学位課程)学業優秀者



令和7年度大学院教育学研究科修了生の中から、学業優秀者（本学における学業、卒業研究等の成果が優れていると認められるもの）として、特別支援教育実践開発コースの岩本純佳さん（群馬県立高崎高等特別支援学校）が学長より表彰されました。
岩本純佳さん、おめでとうございます。



目次

ぐんま教育フェスタで研究発表を行いました…	1	授業実践開発コース……………	6
教職リーダーコース……………	2	特別支援教育実践開発コース……………	10

教 職 リーダー コース

教育課題の解決に資する学級・学年・学校経営を推進する力、児童生徒の実態に応じた実践的指導力の両者を兼ね備えたミドルリーダーの育成を目指します。

公開授業・実践検討会報告

集団形成を目指したピア・サポート ～話し合い活動を通して～

青 木 優 (富岡市立富岡中学校)

10月27日、青木優先生の実践検討会が、勤務校で行われました。

青木さんの研究テーマは「集団形成を目指したピア・サポート ～話し合い活動を通して～」です。青木さんは大学院1年次までの8年間、富岡市立南中学校に在籍していました。南中では従来からピア・サポート活動を取り入れており、学級経営で「週直活動」を全校的に導入、実践を進めた結果、不登校生徒の割合は減少し、「生活満足度」にも改善がみられていました。「週直活動」は南中独自の呼称であり、学級をいくつかの班に分けたうえで、班が日直や当番の役割を週単位で順番に受け持つというものです。

青木さんは2年次に進級と同時に、現在の勤務校に異動となりました。本校は2年前に2校合併により生まれた新しい学校です。ピア・サポート活動は、いじめ未然防止の取組の一つとして行われてはいるものの、「週直活動」のような活動は行われていません。そこで青木さんは第3学年の担任として、学級の中で、円環的な体験過程(ピア・サポートモデル)を生徒に意識させながら、ワールド・カフェ形式での話し合いや、グループワークトレーニングも取り入れ、1学期から2学期にかけて実践を行いました。実践前後でKiss18を比較した結果では18項目中8項目で有意な得点上昇がみられたことに加え、生徒の振り返りの記述にも成長を見取ることができました。スタートアップの実践として一定の成果が得られたと言えるでしょう。今後も着実に実践を進め、学年そして全校的な取組へと広めていくことが期待されるそうです。

検討会は、校内研修全体会の一部として行われました。青木さんの研究経過の発表に加えて、授業で生徒たちに取り組みさせたグループワーク「いろいろな人が住むマンション」に、参加者全員が生徒の気持ちになって取り組んでみました。全員で協力し合わないといけない課題となっていて、このワークを通して協力することの大切さを実感し自己有用感を得ることが



できることを、改めて確認できたかと思います。有り難いことに、その後自分のクラスで実践したという声も聞き、少しでも役に立つ検討会となったことを嬉しく思います。

自己調整学習による自律した学習者の 育成に向けた小学校算数教育 ～一斉授業と単元内自由進度学習の循環を通して～

井 野 祥太郎 (大泉町立東小学校)

10月8日、井野祥太郎先生による実践検討会が、勤務校である大泉町立東小学校で開催されました。井野先生の課題研究テーマは「自己調整学習による自律した学習者の育成に向けた小学校算数教育～一斉授業と単元内自由進度学習の循環を通して～」です。このテーマ設定の理由は、井野先生自身の課題として、授業進度をそろえようとして、低位児童や外国籍児童が十分に理解できないうちに進んでしまうこと、理解が不十分な児童に進度を合わせると、上位の児童に物足りなくなることがあったそうです。できるだけ児童が自分に合ったペースで学び、しかもその際足りないところは自分で補っていけるようにするため、児童に自己調整学習を獲得させることを井野先生は考えました。その手立てとして、一斉授業と単元内自由進度学習を循環させるという授業設計です。



単元内自由進度学習とは、一単元の学習を子どもに委ね、各自が学習の手引きをもとに計画を立てて自分のペースで学ぶもので、教師はチェックポイントや個別支援で支え、学ぶ形態(個人・ペア・グループ)、学ぶ方法(教科書・動画・体験活動)、学ぶ場所(教室・特別教室など)を選択可能にするものです。しかし、これはいきなり児童ができるものではなく、一斉指導の中で学習方略などを身に付けさせた上で、一学期に一単元程度自由進度学習を取り入れるという具体的な手法を考えて、実践しておられます。

公開授業には、自由進度学習に関心を持った近隣大泉町内の先生方4名が参加するとともに、置籍校の校長、教頭、校内の先生、本学からも教職大学院の院生3名、教職大学院の指導教員の山口教授、平林教授、大島准教授、大泉町教委からは荻野教育指導係長、総勢15名が出席しました。公開授業でも児童が教師の開始時の指示後3分で、各部屋、各グループなどに分かれて、自分なりの学びを開始し、しっかり30分以上自学自習した後に元の教室に戻って、全体での振り返りをしていました。

公開授業終了後の検討会では、平林教授の司会で、井野先生自身によるこれまでの研究の歩みの発表が丁寧になされ、その後、出席者から活発な質問があり、特に上述のような児童の学びの態度への賞賛を伴うものが出されました。荻野係長からも、本研究に取り組むこと自体が非常に挑戦的で有益であること、最近重要視されている非認知能力の育成にも役立つだろうという褒めの言葉を頂戴しました。本格的な「自律した学習者」に育つためには、まだ時間はかかると思いますが、これを長期的に実践していただきたいと思います。井野先生はもともと優れた教師としての力量がある方ですが、このきわめて斬新な「自由進度学習」に大変な努力を傾注されてきました。この取り組みを少しずつ他教科や置籍校の学校全体に広げていくことが期待されます。この2年間、井野先生の学びに多大な支援をいただいた大泉町立東小学校および大泉町教委の皆様深く感謝いたします。

互いに認め合い、よりよい人間関係を 築くことができる児童の育成 —PBISの実践を通して—

加藤 敏子 (桐生市立新里北小学校)

11月4日、加藤敏子先生の実践発表と実践検討会が、勤務校である桐生市立新里北小学校で行われました。加藤先生の研究テーマは「互いに認め合い、よりよい人間関係を築くことができる児童の育成—PBISの実践を通して—」です。

加藤先生は、勤務校の教師集団や児童たちのよさを活かしつつ、「児童の気になる行動を管理的ではない仕方でも減らすため、ポジティブ行動支援・介入 (Positive Behavioral Interventions

and Supports, PBIS) やソーシャルスキル・トレーニング (SST) を導入した学級経営の実践を進めてきました。

PBIS の特徴は、児童生徒の気になる行動・問題行動を懲戒などによって減らすとするのではなく、伸ばしたい・望ましい行動を増やすことをめざすことにあります。そのため、望ましい行動が起こりやすい状況をつくり、望ましい行動に肯定的なフィードバックを行ったりといったことが実践の焦点になります。そうした状況づくり、フィードバックの場として、加藤先生はSSTで開発されたアクティビティや、増やしたい行動を児童が考える「ステキな行動チャート」づくり、毎日の帰りの会での「今日のMVP」といった活動を積極的に採り入れてきました。

当日は、こうした実践の一環として、担任する5年生クラスでの、SSTを採り入れた学級活動「おもしろレジャーランド」の授業が公開されました。課題解決に向けた話しあいの中で、児童たちは互いのよさを発見していききました。

授業後の検討会には、星野晋一校長、松田美穂教頭ほか新里北小学校の教員、他校からの参観者と、本学からは田村、新藤、山崎各教授が参加し、活発な討議が行われました。桐生市教育委員会の福田守宏指導主事からは、SSTを単発でなく年間通して実践していることの意義と、その効果がふり返りでの児童の記述に現れていたことを指摘いただくとともに、今後この実践を全校的に展開していくことへの期待などのコメントをいただきました。



教師の主体的な学びと 職能成長を支える校内研修 —個人テーマと対話を中心とした取組を通して—

神 邊 紗耶香 (中之条町立中之条小学校)

12月15日、神邊紗耶香先生の公開校内研修・実践検討会が、勤務校である中之条町立中之条小学校で行われました。

神邊さんは、「やらされ感・形骸化・他人事」等のイメージで受け取られがちな校内研修をどうにかできないかという思いから、研究に取り組んできました。そして、1年間の研修テーマを自分で設定し他者との対話を通して学んでゆく、「個人テーマ×対話」でつくる校内研修」というスタイルを考えました。この研修を円滑に進めるために、①学校教育目標とつなげる、②人事評価システムの自己申告書と連動させる、③個人テーマ研修シートにより可視化する、④対話を校内研修の時間に位置付ける、等の工夫をこらしました。①②は新たな研修スタイルを従来の取組と連動させる、③は一人一人の教員が自分のテーマを明確にするとともに他の人と共有する、④は個



人任せにせずに対話を通して自分の研修を構想する機会を計画的に設ける、というものです。④では計画訪問の機会も活用し、指導主事から助言を頂きました。こうして中之条小学校の先生方は、一人一人のニーズや課題意識に基づく実践を、研修推進委員会のリードのもと、半年間続けてこられました。

公開校内研修・実践検討会には、中之条町教育委員会の教育長山口暁夫様を始めとして次長兼教育指導係長、吾妻教育事務所の指導主事3名、勤務校の校長・教頭・教諭・養護教諭、近隣小中学校の管理職・教諭、教職大学院の院生・教員など、合計50名が参加しました。

最初の実践発表では、神邊さんから研究の狙いやここまでの取組が紹介され、「個人テーマ」というアイディアに至った経緯や実際の取組について、質疑応答が交わされました。また萩原校長から、この研究が教員の職能成長と児童の成長につながるという期待が述べられました。

続く公開校内研修では、学級づくりや教材の工夫等のテーマによって四つのグループが構成され、別々の教室に分かれて、実践発表と対話が行われました。校外からの参加者は教室を移動しながら、研修の様子を参観しました。

その後の実践検討会では、中之条小学校の先生方が四つのグループに分かれて今年度の研修を振り返り、成果と課題を伝え合いました。さらに校外からの参加者も加わり、個人テーマによる校内研修についての議論を深めました。湯浅成夫次長兼教育指導係長からは、①先生方の個々の専門性ととも切実な必要感を感じた、②一人一人が研修の主体となるという研修観に転換し真に身に付く研修となった、③多様な人との対話の中で

自分の取組を内省したこと、学校として挑戦しようとした管理職の意欲等が成果につながった、等の講評を頂き、今後の取組と広がりへの期待が述べられました。最後に、本学より川野文行教授がお礼を申し上げ、閉会しました。

**学級会で話し合い、
児童が自主的に活動する学級づくり**
～学級目標を指針にファシリテートする教師の指導を通して～
高木 理恵子 (太田市立休泊小学校)

11月13日、高木理恵子先生の実践発表（公開授業）及び実践検討会が勤務校の太田市立休泊小学校で行われました。

高木先生は「学級会で話し合い、児童が自主的に活動する学級づくり～学級目標を指針にファシリテートする教師の指導を通して～」をテーマに、児童が自律した自主的な学級を作っていくことを目指して実践を重ねています。研究では学級の課題を見つけて話し合い、自分のすべきことを実践し続ける児童の姿を目指し、学級会において児童が学級目標という行動の目的を意識すること、教師が児童の話し合いを支えるファシリテーターとなることを手立てとしています。

5年生の担任である高木先生は4月の学級開きから学級目標を指標とする学級作りを行っています。実践発表公開した学級会の議題は「学級目標に照らし合わせてクラスの成長を振り返り、12月につなげよう」であり、事前のアンケートと計画委員との打ち合わせにより「整理整頓を続けるために何ができるか」を話し合いました。授業公開には田市教育委員会教育部や校内外の約15名の先生の参観がありました。児童はどうすれば整理整頓を実践し、学級目標に近づくことができるのか意見を出していました。出てきた意見に対して理由を示しながら賛成反対を表明したり、他の児童の発言が聞こえるように声かけをしたりと、ファシリテーターとして参加する高木先生に見守られ、自分たちで積極的に学級会を進める姿が見られました。

実践検討会には休泊小学校の先生方、近隣の小学校の先生方、教職大学院の院生と勤務校の校長先生、教頭先生、太田市教育委員会学校教育課の金澤指導主事にご参加いただきました。群馬大学教職大学院の教員としては小林、平林、大島が参加しました。協議では、高木先生の実践を軸に学級会を実施することの意義と難しさ、教師がファシリテーターとなるための事前の準備の必要性とその努力についての話題が上がりました。その後の金澤指導主事による指導講評では高学級目標を指針とすること、ファシリテーターとしての教師の立場についてその意義を改めて評価していただきました。最後に教職大学院の客員教授の小林先生が謝辞を述べ、実践検討会を閉じました。

実践の公開、検討会にご協力いただきました太田市立休泊小



学校の星野校長先生、岡田教頭先生をはじめとする休泊小学校の先生方、当日参加していただき、深い議論を交わしていただいた先生方に深く感謝いたします。

**小規模小学校における学び合い、
高め合う組織の形成**
—「話し合える場づくり」「研修体制の構築」
「校務支援体制の構築」を通して—
高野 真史 (高崎市立南陽台小学校)

11月20日、高野真史先生の実践発表と実践検討会が、勤務校である高崎市立南陽台小学校で行われました。高野先生の研究テーマは「小規模小学校における学び合い、高め合う組織の形成—「話し合える場づくり」「研修体制の構築」「校務支援体制の構築」を通して—」です。

高野先生は、小規模・単学級で若手教員が多い勤務校の実態からくる多忙感や不安を解消するため、研究テーマ副題にある3つの手立てについて、昨年度の予備実践を経て定着させてきました。

「話し合える場づくり」としては、低・中・高学年の3つのブロック部会を定期的に開催し、情報交換や相談を濃密に行うことで、業務のスムーズな実施や不安の解消に貢献してきました。また、「校務支援体制の構築」については、先行研究を参考した「校務分掌別業務集中中期得点表」で、業務の負担を可視化したり、引継内容も参照できるようにしたりといった工夫が行われました。

そして、「研修体制の構築」については、研修主任との協力のもとで、校内研修の全体テーマに即した個人テーマの設定と追究、各回の研修でのラウンドスタディの導入、研修通信『Fantastic!』の発行といった手立てが講じられました。

実践検討会当日は、高野先生自身の理科授業「電気と私たちの暮らし」（6年生）が公開されたうえで、この授業についての授業研究会とともに、高野先生の課題研究についての報告が行われました。授業および検討会には、福山昭弘校長はじめ南陽台小学校の先生方、他校からの参観者と、本学からは指導教員および大学院1年生2名、総勢27名が参加し、活発な討議が行われました。

高崎市市教育委員会の角岡裕美指導主事からは、授業、課題研究の両面にわたり、高野さんの取り組みが時宜に即したものであることを高く評価いただくとともに、この取り組みが他校にも広がっていくことへの期待のコメントをいただきました。

**教職員の「働きやすさ」と
「働きがい」を高める取り組み**
—ボトムアップ型の業務改善と研修の工夫を通して—
真下 一平 (みなかみ町立新治小学校)

10月10日、真下一平先生の実践発表と実践検討会が、勤務校であるみなかみ町立新治小学校で行われました。真下先生の研究テーマは「教職員の『働きやすさ』と『働きがい』を高め

る取り組み—ボトムアップ型の業務改善と研修の工夫を通して—」です。

本研究は、心身の健康を損なうことなく働ける「働きやすさ」と、仕事に熱意や誇りを持って達成感を得られる「働きがい」が両立した職場環境を目指すものです。

真下先生は、教職員への調査から実態を把握した上で、具体的な手立てとして、教職員の実態に対応して行う「ボトムアップ型」の業務改善提案と、全教職員が参加できる「メンター研修+（プラス）」の企画・実施という2つの取り組みを進めてきました。昨年度は沼田市立沼田北小学校で、今年度



は現勤務校で研究を継続しています。

実践発表と実践検討会には、勤務校の先生方、みなかみ町教育委員会事務局学校教育課管理主事兼指導主事の久保野雅之様、近隣の小中学校の先生方、教職大学院生等、合計23名が参加しました。第5回メンター研修+（プラス）として「みんなの時短テクニックを伝え合おう」をテーマとした公開研修が行われました。参加した先生方は、テストの採点方法など、様々なアイデアを付箋に書き出して共有し、活発に意見を交換しました。

公開研修の後、真下先生からの研究説明と質疑応答が行われました。その後、久保野管理主事兼指導主事から指導助言をいただきました。教職員の多忙化解消に向けた協議会による「提言R7」が示される以前から「働きがい」という視点に着目している点の先見性や、教員の心理状態や日々の業務の捉え方を「見える化」しようとする研修内容について肯定的な評価をいただきました。教職員自らが取り組みたくなるような「ボトムアップ型」の改善アプローチの価値についても言及していただきました。

M2 課題研究報告会

2026年2月14日（土）に行われた課題研究報告会の教職リーダーコースの発表では7名の発表が行われました。オンラインも含め多くの方々にご参加していただき、有意義な報告となりました。各報告について群馬県教育委員会事務局学校人事

課管理主事の小柴瑛先生と課題研究評価部会長の懸川武史先生から指導講評を受けました。今年度の優秀者として神邊紗耶香さん（中之条町立中之条小学校）が選ばれました。

M1 中間報告会

教職リーダーコース1年生の中間報告会②が2026年2月19日（木）に開催され、コースの院生6名が発表を行いました。後期になって、院生は置籍校での実習を通して実態の把握や準備実践を行ってきました。報告会ではその内容を踏まえた来年

度の勤務校での実践の構想について発表が行われました。発表に対しては参加者から活発な質問があがり、充実した討議の場となりました。

1年間を振り返って

感覚的視点から理論的視点へ

～経験が意味をもちはじめた一年間～

阿部和博（桐生市立桜木小学校）

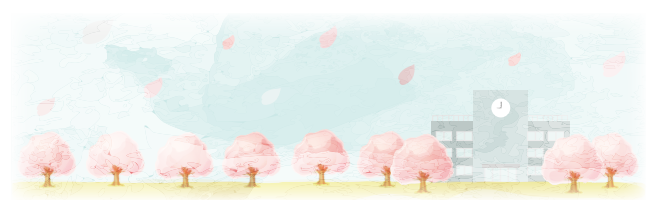
教職大学院での1年間の学びは、これまで積み重ねてきた教師としての実践経験を、理論的に捉え直す貴重な時間となりました。教育現場では、日々の授業や指導の中で「授業は、なぜうまくいったのか」、「児童は、なぜつまづいたのか」を十分に言語化できないまま、経験値として蓄積してきた部分が少なくありませんでした。教職大学院での学びは、こうした経験値を心理学・教育学などの理論と結び付け、根拠をもって説明できるものへと高める機会となりました。講義や研究を通して、これまでの実践経験をもとに感覚的に行っていた授業づくりや学習指導が、どのような理論的背景に支えられているのかを知ること、私自身の実践の強みや改善すべき課題も見えてきました。

また、研究課題に基づく実践指導では、3名の指導教員から多様な視点に基づく指導をいただきました。単に答えを示されるのではなく、私自身の成長につながる思考の視点を提示していただいたことで、授業を客観的に捉え直し、成果と改善点を整理する視点を身に付けることができました。これらの学びは、

今後の授業改善のみならず、後輩教師への指導においても大きな財産になると確信しています。

さらに、異なる校種の院生やストレートマスターとの対話を通して、多様な教育観や実践事例に触れたことも大きな学びでした。自身の実践を相対化し、教育をより広い視野で捉える姿勢が養われたと実感しています。

今後は、教職大学院で得た理論的視点と省察の姿勢を勤務校における教育実践に生かし、児童一人一人の学びをより確かなものにするとともに、学校現場全体の教育力向上に貢献していきたいと考えています。



授業実践開発コース

教科に関する深い学問的な知識・理解を身につけた上で学習内容の系統性や教科の本質を理解し、教室の事実に基づいて授業実践を分析し、省察を行う実践的な指導力を持つ教員の育成を目指します。

2年間の学びを振り返って

綿貫 敦（前橋市立下川淵小学校）

「わかっているけれど、できない。」——子どもたちのそんな姿に向き合い、指導の難しさを感じたことが、大学院への進学を目指すきっかけとなりました。思うように体を動かせない子どもたちの姿に悩むとともに、体育の授業づくりや体育指導に悩む先生方の声を聞く中で、現場の先生方の力になりたい、そして、改めて体育授業について学び直したいと考えるようになりました。

1年次は、体育科教育だけでなく、学級経営や生徒指導、授業研究など、学校教育全体について幅広く学びました。日々の実践に追われる現場では、じっくり考えることが難しい教育理論を改めて学び直すことで、これまでの実践の意味を改めて考えることができました。同じ志をもつ仲間と語り合う中で、自分が本当に取り組みたい研究課題も明確になりました。多くの先行研究や文献に触れたり、先進校の公開授業を参観したりする中で、自分が育てたい子どもの姿をより具体的に思い描けるようになりました。

2年次は置籍校に戻り、実践研究に取り組みました。研究テーマは「体育主任による若手教師の支援を通じた体育授業の充実」で、低学年の「ボールゲーム」単元を対象に、映像を取り入れた体育授業プログラムの活用と、体育主任による段階的な授業



支援を行いました。単元のはじめには体育主任が中心となって授業を進め、その後、学級担任へと引き継ぐ方法を取り入れました。授業の流れが安定することで、子ども一人ひとりの運動の機会が確保され、主体的に活動する姿が見られるようになりました。また、若手教師が安心して授業に取り組めるようになり、授業づくりへの意識にも変化が表れました。理論と実践を往還しながら研究を進める中で、多くの学びと気づきを得ることができました。

この2年間は、日々の実践を立ち止まって見つめ直し、自分の考えを問い直す時間となりました。理論と実践を往還しながら学ぶ中で、これまで当たり前に行ってきた授業や指導の意味を改めて考えることができました。また、仲間と語り合い、多くの先行研究や実践に触れることで、自分が大切にしたい教育観もよりはっきりしてきました。悩みながらも学び続けた経験は、これからの実践につながる大切な財産になったと感じています。ご指導いただいた先生方をはじめ、置籍校の先生方、そして共に学びをつくってくれた子どもたちに心から感謝しています。今後も学びを实践につなげ、よりよい授業づくりに努めていきたいと思えます。



課題研究紹介

小学校国語科「書くこと」における「推敲」の充実に向けて

山本 桜子（ストレートマスター）

現在の小学校学習指導要領解説国語編「B書くこと」の指導事項では、「推敲」について「記述した文章を読み返し、構成や書き表し方などに着目して文や文章を整えること」（文部科学省、2017）とします。辻本・佐藤ら（2018）は、推敲のできる児童が多くない背景として、児童が推敲の必要性や意義を実感できないこと、何を求められているかを具体的に理解できないこと、書くことに精一杯で推敲をするための認知的な余裕がないこと、多くの大人も字句レベルの局所的な訂正だと考えていることを挙げています。そして、佐渡島・嶮田（2018）

による小学校・中学校国語科・高等学校国語科教員を対象にした全国調査では247人中138人（55.9%）が「書くこと」、111人（44.9%）が推敲の指導について「苦手」や「得意ではない」と回答していました。また先行実践から、児童は推敲の際に内容面へ着目しにくく、「困り感」を抱きにくいことがわかりました。

そこで、本課題研究では国語科の「書くこと」の単元において推敲の活動の内容・環境と「必要感」を持つための手立てを



検討し、形式面と内容面を効果的かつ段階的に指導・支援する方法について追究することを目指しました。行った3回の実践では、対話による児童同士の相互推

敵を行いました。また、単元の内容と形式面と内容面の要素を踏まえた推敲の観点、自他の文章の改善点やよさのを見つけ方をワークシートの記述例や実演で示しました。

実践を通じた成果として、推敲の観点と方法を示すことで、誤字脱字の修正に留まらない形式面と内容面の推敲、他者の文章から自分の文章をよりよくする推敲を小学校段階でも行うことができました。また、単元の主目的を達成させながら推敲の活動を行うこともできました。扱う文章の特徴や要点を押さえることで児童は着目すべき点に気付き、観点を基に児童同士で文章をよりよくすることができたのです。

課題として、文章の基本や単元の重要な要素を取りこぼさない観点的取り上げ方、更なる学習環境の整備が挙げられます。今後も実践を繰り返し、自分の書いた文章がよくなったと実感

できるような授業を追究していく必要があります。

2年間、教育の理論を学び実践を行ったことで、目の前の子どもたちに向き合い、個々に抱える課題に気付き解決策を実行していくことの大切さを強く実感しました。これからも子どもたちが困難を解決するために何を求めているのか見取り、子どもたちの背中を押すことのできる授業を追究し続け、実践していきたいと思っています。



実践・実習を踏まえた院生相互の学び合いの場 ～授業実践開発実習Ⅱ「サポートワークショップ」～

本実習は、授業実践開発コースM2生を対象に、年間を通じて2時間の実習が計8回実施されました。担当は、授業実践開発コース企画運営委員が2名ずつ交代で務めました。このサ



ポートワークショップのねらいは、2年次の実習Ⅱや課題研究Ⅲ・Ⅳを進める中で生じる疑問や悩みを共有し合い、解決に向けた見通しをもつ機会とすることです。

令和7年度は、現職教員の院生については、実習免除となっていることから、ストレートマスター7名によるサポートワークショップとなりました。内容は、課題研究に関する進捗状況の共有や模擬授業を行いました。それに加えて、課題研究の実践授業などを実施した院生については、具体的な実践報告をしてもらいました。写真は、ある院生の中学校における数学の授業実践の場面で、図形の授業の課題解決の場面です。ストレートマスターの院生たちは実習校である附属小・中学校の実習の取組や近況を共有し合い、それぞれの実習の環境や研究テーマは異なっていますが、授業実

践開発コースの院生全体で研究をやり遂げたいという仲間意識を高めるよい機会にもなっていたように感じます。

サポートワークショップ実習日誌の記述内容から、お互いの実践を聞き合い、院生同士で学び合っている姿もうかがえました。例えば、「Aさんの実践発表から、自分の授業計画の展開の流れや課題設定の場面を見直す必要があることに気づけた。生徒が他者に説明することやそれに対する質問の必要感を感じ取れる導入の工夫が求められる。」「他の院生から出た意見は私にも当てはまるものが多かった。何が根拠でその発言になったのか、生徒に問うことの大切さがわかった。」「サポートワークショップを通して、全員が自分の授業づくりに向けて、思いをしっかりとっていることがわかった。授業におけるねらいを意識して練習問題を作成することなど、私はあまり意識できていなかった。指導案を作成する際には、本時のねらいをもう少し吟味して設定したいと思った。」などの記述もみられ、相互に授業力を高めていこうという意識の高まりを感じ取れます。

お互いの経験や知見を交換し合うことで、課題研究に対する意欲をさらに高めていく場として本ワークショップが機能していたと感じています。

令和7年度 授業実践開発コースM2課題研究報告会

令和8年2月14日(土) 8:40～16:20

課題研究テーマ一覧

氏名	教科	置籍校	課題研究テーマ
赤石 賢也	美術		「生活や社会」の中の造形に着目したフィールドワーク型鑑賞活動の可能性 —中学校美術科における授業実践を通して—
井上 千桂	国語	高崎商業高等学校	高等学校国語科における「書くこと」の授業改善 —学びの質を高める学習課題と学習環境デザインの工夫—
宇賀神 凱	数学		中学校数学科における説明する力の育成を目指した授業実践 —聞き手の質問する力に焦点を当てて—
小林佐恵子	図画 工作	甘楽町立新屋小学校	図画工作科・総合的な学習の時間における創造的な主体性を回復する授業づくり

氏名	教科	置籍校	課題研究テーマ
角 真綾	数学		中学校数学科における批判的な態度を養う学習指導 —問題解決過程の見通しに着目して—
住谷 真悠	国語		主体的に読書活動に取り組む生徒を育てる国語科学習指導 —本を紹介し合う学習活動の工夫を通して—
高橋 弓	音楽	茨川市立三原田小学校	小学校音楽科表現領域におけるイメージを大切に「音楽づくり」の実践研究 —協働的な学びを通して音楽的な創造性を育む授業デザインの構想—
中島 千尋	英語		即興的な英語のやり取りを充実させる指導・支援の工夫 —コミュニケーション・ストラテジーに焦点を当てて—
原口 勝幹	社会		中学校社会科における学習手法「ミステリー」を用いた諸地域学習の単元デザイン —予測する力を包摂した思考力・判断力・表現力の育成に着目して—
二木 朋与	理科	群馬県立吉井高等学校	高等学校理科「化学基礎」の「探究の過程」をベースにした授業改善 —探究を振り返って実験結果を分析・解釈する力の育成を目指して—
堀越 悠佑	英語		課題解決型学習を用いた相手意識の育成 —中学校英語科におけるオーセンティック教材の活用—
山崎 優香	体育		小学校体育科における運動ができる楽しさを高める手立ての有効性の検討 —小学校中学年器械運動単元において運動が苦手な児童に焦点を当てて—
山本 桜子	国語		小学校国語科「書くこと」における「推敲」の充実に向けて
横山 晴美	英語		読むことの言語活動における推論・評価発問を用いた効果的な指導 —要点を捉える力の育成を目指して—
渡部 祐子	社会	伊勢崎市立豊受小学校	主体的に学習に取り組む態度を育む小学校社会科の授業デザイン —学習過程に対応する行動指標に則った児童の振り返り及び学習評価を通して—
綿貫 敦	体育	前橋市立下川淵小学校	体育主任による若手教師への支援を通じた体育授業の充実 —小学校低学年の「ボールゲーム」領域の授業実践を通して—



1年を振り返って

学び続ける教師へ

茂 木 健太郎 (ストレートマスター)

教職大学院での一年間は、私にとって教師としての在り方を具体的に描くことのできた、かけがえのない時間でした。私は学部卒であり、まだ現場での経験はありません。そのような立場で大学院に進学した私にとって、現職の先生方や同じ学部卒の院生など、多様な背景をもつ仲間と共に学ぶ環境は大きな刺激となりました。それぞれがこれまでに積み重ねてきた経験や学びをもとに語る言葉に触れることで、自分一人では気づくことのできなかつた視点を得ることができました。

授業では講義形式よりも話し合いや発表が中心となり、一つの問いに対して多様な視点から意見が交わされました。実践に裏打ちされた言葉に触れる中で、自分の考えを広げ、深めることができました。立場の違いがあるからこそ対話が豊かになり、学びは一人で完結するものではなく、他者との関わりの中で生まれ、磨かれていくものであることを実感しました。また、議

論の中で自分の考えを言語化し、他者から問い返される経験は、自身の理解の曖昧さに気づく契機にもなりました。問いに向き合い続けることの大切さと同時に、自らを更新していく姿勢の重要性も学びました。

この一年を通して、教師は児童・生徒に一方的に教える存在ではなく、共に問い、共に成長していく存在であると考えようになりました。教師自身が学び続ける姿勢を持ち続けることこそが、児童・生徒の主体的な学びを支える基盤になるのだと考えます。

対話を重ねる日々の中で、学び続けることへの確かな自覚が芽生えました。まだ大学院での学びは続きますが、この一年で得た対話の姿勢を大切にしながら、さらに視野を広げていきます。そして、自らも学び続ける存在として成長し、将来、児童・生徒の学びを支えられる教師へと歩みを進めていきます。

1年を振り返って

よりよい授業を求めて

山本 芹 菜 (ストレートマスター)

教職大学院での一年間は、私にとって「よりよい授業とは何か」を問い続け、自身の未熟さと向き合いながら成長を実感した時間でした。日々の授業では、教科教育にとどまらず、学級経営やデジタル機器の効果的な活用、インクルーシブ教育など、学校教育を支える幅広い視点について学びました。授業実践開発コースのみならず、他コースの院生の方々と共に学ぶ中で、経歴や専門、立場の違いを越えて意見を交わす機会に恵まれました。ストレートマスターである私にとって、現職の先生方から伺う実践や学校現場の実態は何より貴重な学びでした。具体的な経験に基づくお話は、教師を志す身として今何ができるのか考えたり、自らの課題を見つめ直したりする契機となりました。対話を重ねる中で、物事を一方向からではなく多面的・多角的に捉える姿勢の重要性、そして考えることそのものの楽しさを実感しました。この経験を子どもたちにも届け、学ぶことが楽しいと思える授業を実現したいという思いが一層強まりました。

課題研究では、思うように進まず焦りや不安を抱くこともありました。指導教員の先生方や院生の方々の助言と励ましに支えられ、粘り強く取り組むことができました。その過程で、研究は一人で完結するものではなく、他者との対話と省察の積み重ねによって深まるものであると学びました。先進校の公開研究会に参加し、子どもたちの姿を観察する中で、実態に応じて授業内容や教師の手立てを柔軟に工夫することの重要性を改めて認識しました。これは、多様な学校現場に足を運んだからこそ得られた学びです。また、専門外の教科の授業を参観できたことも、授業づくりを考える上で視野を広げる貴重な機会となりました。

来年度は実習が中心となります。これまでに培った理論を実践へと結び付け、子どもたちにとってよりよい授業ができるよう努めてまいります。学び続ける姿勢を大切にしながら、今後も研鑽を積んでいきたいです。

令和7年度 授業実践開発コースM1 課題研究報告会

令和8年2月17日(火) 9:30~14:30

課題研究テーマ一覧

氏名	教科	置籍校	課題研究テーマ
石原 亜朗	体育		小学校体育科授業ボール運動領域「ベースボール型」における運動有能感を高める実践研究
栗原 瑠菜	国語		聴き合うことを通して児童一人ひとりの読みが深まる文学的な文章の授業 —課題設定と学習環境デザインの工夫による授業文化づくり—
関口 信吾	国語	太田市立藪塚本町小学校	児童が物語文についての考えを聴き合い、豊かな想像力を育む授業 —探索的会話を促す参加の在り方と課題設定の工夫—
高橋 正人	国語	群馬大学共同教育学部附属中学校	中学校国語科の「考えの形成」を重点に置いた説明的文章の授業づくり —問いの更新と再構成を核に、「自分事」で読む学習過程を単元に組み込む—
中川皇太郎	数学	群馬県立高崎北高等学校	高等学校数学の主體的・対話的で深い学びを目指した授業改善 —教科書解説を中心として—
蓮舎 葉月	家庭	甘楽町立新屋小学校	児童のウェルビーイングの向上に向けてエージェンシーの発揮を促し自律した学習者の育成に役立つキャリア・パスポートと評価指標の開発
堀口 寛人	社会	富岡市立小野小学校	思考力・判断力・表現力を育成するための小学校社会科の授業デザイン —単元内自由進度学習における社会的事象の見方・考え方を働かせた「関係図」の作成を通して—
松浦天矢斗	国語	群馬県立前橋西高等学校	高等学校国語科における「読むこと」と「書くこと」の一体的な充実
目黒 浩志	美術		素材との探索的な関わりを起点とした探究過程を生み出す授業デザイン —中学校美術科における授業実践を通して—
茂木健太郎	体育		児童の内面的な学びを促す「体ほぐしの運動」の授業づくり —「ぎこちなさへの気づき」を手がかりとした授業の検討—
茂木まりあ	保健 体育		中学校保健体育科における体育理論の知識を運動実践に結び付ける領域横断単元の有効性の検討
山本 啓太	体育	藤岡市立藤岡第一小学校	小学校ボール運動における「競争」と「共生」の両立を目指した授業実践 —体育授業プログラムに協同学習を取り入れた学びを通して—

氏名	教科	置籍校	課題研究テーマ
山本 芹菜	国語		中学校国語科における古典を探究的に学ぶ授業実践
渡辺 堅太	体育		運動有能感における統制感を高める小学校体育科器械運動の授業づくり —協同学習における「ジグソー法」に着目して—



授業実践開発実習Ⅰで学んだこと

高橋 正 人（群馬大学共同教育学部附属中学校）

授業実践開発実習Ⅰでは、全国の公開研究会に参加する機会をいただいた。置籍校勤務の間も毎年1回は関東圏の研究会に参加してきたが、業務の都合で断念することも少なくなかった。いただいた機会を最大限に生かし、自身の研究課題へつなげることを意識して臨んだ。

多くの公開研究会の中でも最も印象に残ったのは、福岡教育大学附属福岡中学校の公開研究会である。研究主題「豊かな未来社会を切り拓く生徒の育成」のもと、探究的なカリキュラムデザインと自律的な学習を促す授業づくりが各教科で展開されていた。特に、探究をレベル1～4として定義し、教材や教科の特性に応じて到達像を整理していた点が示唆的であった。また、各教科の学びを総合的な学習「FT（フロンティアタイム）」へ接続し、探究を深化させていた。当日の子どもたちの成果発表からは、教科で得た見方・考え方を手がかりに、自分の問いを立てて掘り下げていく姿が伝わってきた。どの生徒も前のめりに発表し、探究が自分の学びとして成立していることが印象

的であった。

この学びは私の研究関心とも結び付く。私は中学校国語科の説明的文章の学習において、導入の疑問を学習課題として成立させ、途中で問いを更新し、振り返りを手がかりに終末で自分の考えとして再構成していく学習過程に着目している。今後は、停滞点を具体的に捉え、読みが不安な層への支援も含めて、学習過程の改善に還元される研究として実践を積み重ねていきたい。

私は、授業力の向上と国語科教育に関する知見を深めたいと考え、大学院に入学した。これまでの実践は即興的・直感的になりがちで、理論と実践の往還を十分に言語化できていなかったと振り返る。現場を離れた一年は短かったが、授業や学習を枠組みで捉え直し、実践を説明可能な形で整理する視点を得られたことは大きい。4月より置籍校に戻るが、実習Ⅰでの学びを生かして、目の前の子どもの学びに還元される研究となるよう真摯に取り組んでいきたい。

特別支援教育実践開発コース

特別支援学校・特別支援学級・通級指導教室において重度化・重複化、多様化する教育的ニーズ、インクルーシブ教育に対応できる教育学、心理学、医学、福祉に関わる専門的な知識を持つ教員の育成を目指します。

2年間の学びを振り返って 岩本 純 佳（群馬県立高崎高等特別支援学校）

特別支援教育について右も左も分からないまま特別支援学校に赴任し、生徒との係わり合いを通して、少しずつ経験を積み重ねてきました。授業の組み立てや生徒との係わり方について

も、次第に理解できるようになったつもりでいましたが、その多くは経験則や感覚に頼ったものでした。このままでよいのだろうかと感じ、自分の実践を理論的に捉え直し、一から学び直

したいと考え、大学院への進学を決意しました。

講義やゼミを通して、これまでの自分の指導観を、何度も見つけ直しました。前任校・置籍校ともに高等特別支援学校に勤務していることから、「卒業後の生活や就労に必要な力を身に付けさせたい」という思いが強く、教師が「何を教えたいか」を中心とした授業づくりになっていたことに気付いたのです。

2年次の研究では、生徒の内発的な思いを出発点とした授業実践に取り組みました。初めは、「これで大丈夫なのだろうか」と正直不安でした。しかし、実践を重ねていく中で、生徒が学習内容を自分の生活と結び付けて捉え、主体的に授業に取り組もうとする姿が見られるようになりました。教師が「何を教えたいか」だけでなく、「生徒が何を感ず、何を大切にし、何を知りたいと考えているか」という視点で授業を考えることの重

要性を実感しました。現場にいただけでは気付くことのできなかった視点や考え方を、この2年間で学ぶことができました。

人生には数え切れないほどの選択の機会がありますが、教職大学院への進学は、私にとって正しい選択だったと、2年間の学びを振り返って言い切ることができます。この2年間で、教師としてだけでなく、一人の人間としても大きく成長することができました。どんなときでも温かくご指導くださった阿尾先生と峯岸先生をはじめ、授業や研究を通してご指導・ご助言をいただいた先生方、研究に協力してくださったすべての皆様、そして2年間を共に過ごしてきた大好きな仲間との出会いに、心より感謝申し上げます。教職大学院での学びを目の前の子どもたちに還元できるよう、今後も自分らしさを忘れず、日々努力を続けていきたいと思ひます。

2年間の学びを振り返って

浪内星佳(群馬県立渋川特別支援学校)

1年目は、講義での学びに加え、先進校の視察、特別支援学校以外の校種にも足を運びました。そして特別支援学校の同期、校種の違う同期とも授業作りや子どもとの係わり方について対話を重ねてきました。

長らく遠のいていた、特殊教育学会等にも久しぶりに参加し、たくさんの方々の取り組みや教育観を浴びてきました。またそれと同時に自分とも対話を重ねてきました。置籍校を離れ、今一度自分の今まで大切にしてきた教育観を改めて考え、再構築する時間はとても贅沢な時間で、今思い返しても貴重で大切な時間であったと感じています。

2年目は置籍校に戻り、自立活動の指導で自作絵本を用いながら授業を行いました。自分の行った実践について、様々な可能性を見出した一方で、自らの課題を浮き彫りにする経験もいたしました。特に印象に残っているのは、ゼミで実践報告書の修正を行っていた際のことです。「どのように授業を構築したか」というプロセスを改めて確認する中で、私が挙げたキーワードには「児童生徒の問題行動の背景にあるもの」という視点が欠落していました。つい表面化している「問題行動」そのもの

に目を奪われがちですが、その背景に何があるのかを常に問い続けなければなりません。自分の思考の偏りを改めて認識した今、子どもは今何を考えているのか、どのように感じているのか、なぜ問題行動が起きているのか、どんな支援をしたら目の前の子どもの生活が豊かになるのかを、その都度考えていくべきだと再確認することができました。

この2年間で、たくさんの方々と教育について語り合ったこと、実践を通して考えたり感じたりしたことを同僚と共有したこと、どれも良い時間でした。特に教授の方々には、私が発したまとまりのない言葉を丁寧に拾っていただき、明確に言語化していただきました。「2年間で色々学んだ。」と終わりにするつもりはありません。ここがゴールではなくスタート地点だと思っています。今後も考え学び続ける姿勢を忘れず日々を過ごしていきたいです。

2年間、温かく丁寧にご指導いただきました霜田浩信先生、長谷川剛広先生をはじめ、お世話になったすべての方々に心より感謝申し上げます。

課題研究紹介

教職大学院での1年間の学びから

—子どもの姿から学び続ける—

塩野藍子(群馬県立沼田特別支援学校)

教職大学院での一年間は、私にとって「子どもの姿の捉え方」を問い直す時間であり、同時に自分自身の教育観を見つめ直す時間でもありました。これまでの私は、子どもを「できる・できない」という枠組みで捉えがちでした。作業学習では作業等を正しく行うことを重視し、卒業後に困らないようにと正解を伝え先回りして支援することが良い関わりだと考えていたのです。しかし、その支援が子ども自身の考える機会や選ぶ経験を狭めてはいなかったかと、立ち止まるようになりました。

講義や実習、授業分析を通して、子どもの行動の奥にある意味や背景を丁寧に読み取ることの重要性を学びました。教授や院生との対話を重ねる中で、自分の見立てがいかに一面的であったかにも気づかされました。多様な捉え方があるからこそ、子どもを中心に据え、チームで連携していくことの大切さを実

感しました。

こうした学びの中で、私は「子どもが自分で選び、納得して取り組む学びとは何か」を問い続けてきました。主体性とは単に任せることではなく、見通しを持てる環境や対話を通した振り返りの中で育まれるものだと考えるようになりました。9月に実施した課題発見実習では、工程を可視化し、小さな選択を重ねながら教師の関わり方を見直しました。その中で、「これをやりたい」「もう一度挑戦したい」と語る姿に出会えたことは、大きな気づきでした。

また、主体性を支えるためには、教師同士の対話と合意、そして一人ひとりの実態を丁寧に捉えるアセスメントが欠かせません。自分の正しさを押し通すのではなく、子どもの姿から学び続ける姿勢こそが専門性なのだと感じています。

この一年で得たのは、「問い続ける力」です。これからも、子どもが自分らしく幸せに生きるための学びとは何かを、実践の中で探究し続けていきたいと思ひます。

教職大学院での1年間の学びから

—学校現場を離れて見えてきたもの—

高宮 裕香 (群馬県立吾妻特別支援学校)

教職大学院での1年間は、学校現場を一度離れたことで、これまで当たり前だと思っていた実践や考え方を見つめ直す時間となりました。大学院での講義や、他施設の見学、異なる立場の院生との対話を通して、学校現場で当然のように行われていることが、必ずしも当たり前なことではないということに気づかされました。現場にいただけでは見えにくかった課題が、距離を置いたからこそ浮かび上がってきたと感じています。

とりわけ強く印象に残っているのは、大人が「課題」だと捉えていることが、必ずしも子ども自身にとっての課題ではない場合があるという視点でした。教師の価値観や目標を基準にした支援や授業は、知らず知らずのうちに子どもの思いや願いから離れてしまうことがあります。そのことに気づかされたことは、私にとって大きな学びでした。

講義やゼミを通して、子どもの行動や表現の背景にある思いに目を向け、子どもの視点から支援や授業を構想することの重要性を学びました。教師が計画した枠組みに子どもを当てはめるのではなく、子どもの自発性や「やってみたい」という思いが引き出される係わりを意識しながら授業を構想していくことが求められると感じました。そのためには、教師が一步立ち止まり、子どもから見えている世界を想像しながら係わる姿勢が必要であることを実感しました。

来年度は置籍校に戻り、子どものありのままを受け入れた授



2025年度(令和7年度) 修了生課題研究題目

岩本 純佳	知的障害特別支援学校高等部家庭科「家族・家庭生活」に関連付けた授業づくりの検討 —生徒が家族や家庭生活へ関心を高め、主体的に活動するための工夫—
浪内 星佳	自立活動における自作絵本の実践的活用 —知的障害生徒の中心的な課題へのアプローチ—

入試情報

令和8年度入学者用の入試は2025年11月に行われました。令和9年度入学者の入試情報の詳細につきましては、以下QRコードの入試情報またはお問い合わせ先を参照してください。2026年8月5日(水)17:30よりオンラインで説明会も実施します。



お問い合わせ先

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2 群馬大学共同教育学部入学試験係
TEL: 027-220-7225

業づくりに取り組んでいきたいと考えています。ゼミや講義でお世話になった先生方、1年間共に学んだ院生の皆様、そしてお世話になったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

教職大学院での1年間の学びから

—子どもの育ちに寄り添う教育を見つめ直す—

室塚 美保 (埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園)

これまで特別支援教育のさまざまな現場に携わる中で、常に大切にしてきたのは「子どもを中心に考えること」でした。しかし経験を重ねる中で、目の前の支援だけでは十分ではなく、家庭との協力や関係機関との連携があってこそ、子どもの育ちは支えられるのだと感じるようになりました。子どもの成長は、学校だけで完結するものではなく、日々の生活や周囲との関わりの中で少しずつ形づくられていくのだと実感しています。支援の継続性を意識する大切さも痛感しました。

教職大学院での1年目は、これまでの実践を立ち止まって見つめ直し、言葉にして整理する時間となりました。特別支援教育の基礎を学び直すとともに、学校という場を組織や地域との関係の中で捉え直す機会となりました。講義やゼミでの対話を通して、教育は学校だけでなく、家庭、医療、福祉とつながり合いながら築いていくものであることを学びました。加えて、学校・学級経営や多様性を踏まえた教育の視点に触れることで、支援を「個」だけでなく「環境」から整える発想も得ることができました。院生同士の学び合いは、自分とは異なる実践や価値観に出会う機会となり、考えを更新する大きな支えになりました。

これからも、子どもがもつよさや可能性を大切に、その子らしい育ちを支えていきたいと考えています。そのためには、保護者と丁寧な思いを共有し、安心して子育てができる環境を整えること、そして学校・医療・福祉が同じ方向を向いて支援していくことが重要であると感じています。2年目となる来年度は、置籍校において乳幼児教育相談にかかわる子どもとその保護者支援や、就学移行期のつながりを意識した実践に取り組み、学びを現場で確かめながら改善を重ねていきたいと考えています。

最後に、ご指導くださった先生方、ともに学び合い支え合った院生の皆様、そしてお世話になったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。